

2023 令和 5 年度
東京藝術大学 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

博士論文 要旨

写真における自己表現とアイデンティティ
——変化のプロセスを視覚化すること

陳 雨心
(チン ウシン)

学籍番号 1319924

主査 佐藤時啓教授
論文第一副査 長谷部浩教授
作品第一副査 鈴木理策教授
外部副査 瀬戸 正人様

写真は筆者の主観的な意識を追求し、自身の生活や願望を形成する媒体であり、また自己アイデンティティを表現する手段の一つである。本論文は、筆者が日常生活を再構築していく中で自己の定義を拡張し、新しいアイデンティティを見出す過程を写真を通して考察している。本論文は四つの章から構成されており、それぞれの概要を以下に述べる。

第一章では、最初に自己アイデンティティを認識するため、中国で撮影された筆者が所属する「一人っ子」世代に焦点を当てた、写真家たちの写真作品を時間順に示しながら、そのアイデンティティの変遷について分析する。本章では、写真作品を通じて筆者が所属する世代の成長を振り返った上で、筆者自身の現状やアイデンティティに疑問を投げかけながら探究する。自己アイデンティティに対するこの探究が、筆者の創作の源となっていることを示す。

第二章では、引き続き写真という表現形式を用いて、自己アイデンティティを確立するための方法を探求する。現代社会においてそれは、自分自身で選択し作り出す自伝のようなもので、自身を構成する物語であることが広い関心を集めた。自己物語というのは、常に他者に向けて語り出される物であり、他者とのコミュニケーションの中で形成されていくものである¹。他者とのコミュニケーションの手段として、写真がいかに作者と被写体の間で作用したかについて考察する。第一節では、ナン・ゴールドインの自伝的作品を例に挙げ、写真を通じて自己表現をする方法や、作者自身である被写体との関係性を表現することで自己アイデンティティを定義する方法を見出す。

第二、三節では、創造と体験とした筆者の自己アイデンティティを表現する過去の作品を取り上げる。筆者は、修士課程修了制作『悲観主義のブーケ』で、自分自身と同じ経験をした被写体たちの個人的な生活を撮影し、それぞれの被写体のさまざまな生活状況を反映しながら、彼らのアイデンティティを視覚的に表現した。それに加え、他者との交流は筆者の自己アイデンティティを多元化することにもつながると考えた。

また、過去の自分を現在の自分と一旦区別することで、自己を解放し、変化を受け入れることができた。写真は、過去によって現在を照らし出すように、瞬間の記録だけでなく、変化の記録としても機能するといえる。写真によって人々が自分自身の可変性を保持しつつ、同一性を維持する可能性を探る。

第三章は、博士課程で提出した作品の解説である。筆者は写真制作を通じて自己の物語化を行い、自己の可変性を認識し、自分自身の選択によって新しいアイデンティティを表現しようとした。

今までの筆者の作品は、主にアイデンティティの喪失という悲観的な観点から制作された、過去の自己にしか焦点を当てていないアイデンティティの迷路に閉じこもったものであった。「私」が一体何であるか。この問いを究明するため、自己について再び問い直し、その中で写真がもたらす力や影響を探究している。自己の本質や欲求を具体化し、この過程で、心理的に回避してきた写真に対する恐怖、つまり自分に対する恐怖に向き合い、揺らぐ自己を安定させる手助けとなる。筆者は自分が誰なのか見失わないように、写真を撮ることで自己を現実に繋ぎとめているのである。

¹ Giddens, Anthony 1991 *Modernity and Self-Identity*, Polity, p. 76

結論として、筆者は、自己アイデンティティとは、テセウスの船のようであり、それは絶え間なく航海する海上の船であると理解した。写真は人々に変化の存在を視覚的に表現し、見せることができ、自己との関係を変え、成長を促進する内なる動機や変化を促す力を持っていると考える。写真を通じて過去の喪失と和解し、コミュニケーションを通じて自らが選択しながら、新たな出会いや新しい集団関係と過去の出来事を結びつけることで、変化し続ける自己アイデンティティを見つける準備が整うと考える。

本研究を通じて、新たな写真に関する可能性を提供し、筆者自身に限らず、自己アイデンティティに疑念を抱く人々や、生涯にわたり経験する「自己の変容」に対処し、積極的に自己を再構築する手段を提供することを目指している。